

詩篇 第63編 3節

「あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私のくちびるは、あなたを讃美します。」

いのちにもまさるゆえに、と歌うことばにこころがひかれる。およそ、だれもがいのちを支え、育みと日々励んでいるのが常である。いのちのためにはありとあらゆる労苦も厭わず励むのが常である。いのちこそ守るべき最後の砦と相手を殺す闘いさえある。いのちさえあればこそ、と言われるゆえんである。

しかし、ここではいのちにもまさることがある、と歌う。日夜いのちを支えるため生きているなかで、そのいのちにまさるものがある、という聞き捨てならない、聞き逃せないことばが放たれている。それゆえ、私のくちびるは讃美するとまで告白する。いのちがすべてのはずなのに、それにまさるものがある、と歌う。どこでも聞くことができない言葉がある。

いのちにまさるもののがどこにあるのか。それが関心ごとである。この歌い手は、あなたを繰り返す。あなたの恵み、あなたを讃美する、と讃えている。主なる神に向かい歌っている。このお方こそ、いのちにまさるものをお持ちであり、そのまさるものをお注がれるお方である。人が自分でいのちをどうにかしようとしても、どうにもならない局面がくる。しかし、そのとき、あなたと呼ぶ主なる神に歌い望みを置く。

2025年5月7日